

2024年10月31日（火）

老球の細道836号

10月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋と悠々自適の生活を送ろうとしたが、ここに来て新しい仕事が二つ舞い込み、加えてBリーグディレクターを3回も担当。10月前半は試練の秋だった。試練を乗り越えればお酒が美味しく飲める。しかし充実感が油断に、1年ぶりに風邪をひいてしまった。まさかコロナではと思い、早速病院でコロナ、インフルの検査をしたが陰性でホッとした。夜中に咳で何度も目覚めさせられたが毎晩見る夢はバスケットの事ばかり。選手時代、コーチ時代の失敗ばかり。寝ても覚めても見る夢はバスケットばかり。

1・テレビから

◆「形こそ 深山がくれの 朽木なれ 心は花に なさばなりなん」〈WOWOW プライム：映画『峠 最後のサムライ』〉：幕末の長岡藩家老河井継之助を描いた司馬遼太郎原作『峠』を役所広司主演で映画化したものである。ラストシーンで語られたこの歌は古今和歌集におさめられている。私も見た目は老醜でも常に心の中に花を咲かせる気概を持ちたい。

◆「やрмаいか！」〈NHKBS「新日本風土記」：東海道城下町の旅〉；私の弟の住む浜松では飲み会の乾杯で「やрмаいか！」と声をかけるそうである。「やってみよう」「やってみようじゃないか」と新しいことにチャレンジする精神を鼓舞するそうである。

1・読書から

◆「学ぶとは、それぞれの段階のゼロ地点に戻ってやりなおすことです」〈『知の技法』小林康夫編：東京大学出版会〉：フランスの哲学者アランは「教えるとは希望を語ること。学ぶとは誠実を胸に刻むこと」と言った。水は高き所から低き所へ流れる。その落差が大きいほど流れの勢いは強い。知識、技術の修得もまた同じ。常に謙虚に学べば得ること大である。

◆「相変わらずが一番いいな。あんまり相変わるものだから」〈夏目漱石『それから』：集英社〉：毎日のようにとんでもないことが世界中で起こっている。身に降りかからないから他人事であるが、わが身にふりかかったら自分を見失わないで対応できるのだろうか。

2・新聞から

◆「すべての事の極端を想像して覚悟を定め、マサカの時に狼狽せぬように」〈朝日：折々のことば：福沢諭吉〉：試合前にゲームプランを準備する。最悪の状態を想定し、それに対する対応策も準備してメモする。このメンタルリハーサルが楽しくも苦しくもある。

◆「私の夢は、死ぬときに最高の考えを持っていること。その時に何を考え、自分の人生を総括するか。それが楽しみなんです」〈朝日：語る：暉峻淑子〉：かつて『豊かさとは何か』のベストセラー本を著す。その道の超一流は皆死ぬまで現役で情熱を持ち続けている。

◆「人を動かすのに大切なのは『物語』を伝えること」〈朝日：パイロット広告〉：野球の栗山英機氏の言葉。現役コーチの頃、世の中のトピックがバスケットや人生にどのようにかわっていくのか物語を作り、練習前のミーティングで話しをすることが楽しみであった。